

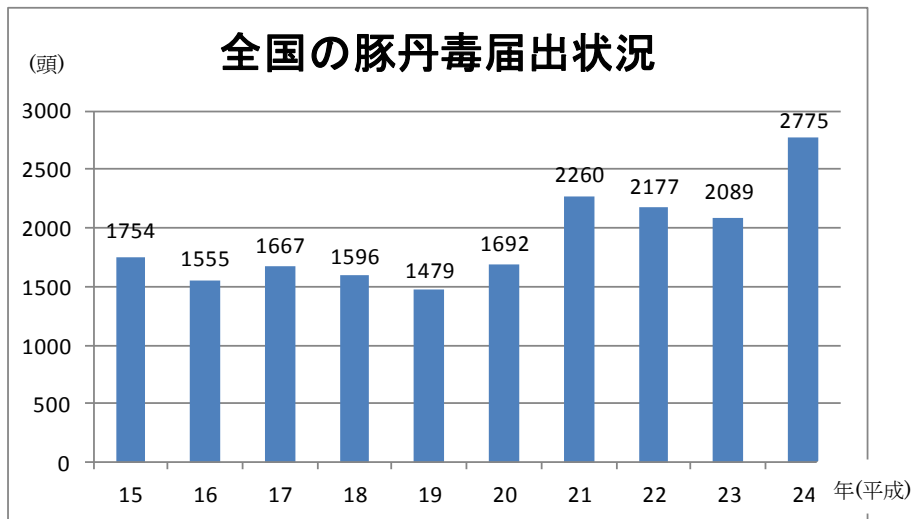
家畜保健衛生だより

平成25年度 第6号

豚丹毒を予防しましょう！

豚丹毒は豚、いのししの届出伝染病で、人や他の哺乳類や鳥類にも感染し、人が感染した場合は類丹毒と呼ばれます。

近年、全国的に届出は増加傾向にあり、県内の食肉センターでも平成23年には19戸23頭、平成24年は24戸39頭(県外産を含む)の届出がありました。届出は食肉センターでの摘発が大多数ですが、出荷豚のと殺禁止やと体の全廃棄など、経営に大きな影響を与えます。豚丹毒は決して昔の病気ではないので、農場に適したワクチンプログラムで予防する必要があります。



- 原因：豚丹毒は細菌(豚丹毒菌)が経口あるいは皮膚の創傷部位から感染する事で起こる疾病です。感染豚の糞便や尿から菌が排泄され、それに汚染された飼料や飲水、畜舎の床、壁、畜舎内外の土壌や下水を介して汚染が広がります。
- 症状：急性のものから慢性のものまで大きく4つに分けられます。

転帰	区分	症状	主な発見場所
急性	敗血症型	突発的高熱、全身性チアノーゼ	農場 と畜場
	じんま疹型	発熱、食欲不振、皮膚の丘疹(菱形疹)	
慢性	関節炎型	四肢の関節の腫脹(特に後肢)、は行	
	心内膜炎型	多くは無症状、剖検で発見	

●予防

○ワクチン：予防にはワクチンが有効であり、生ワクチンと不活化ワクチンがあります。

生ワクチン	不活化ワクチン
接種回数が少ない。安価	接種回数は最低2回。やや高価
移行抗体の影響を受けやすい	移行抗体の影響を受けにくい
抗菌性物質の影響を受けやすい	抗菌性物質の影響を受けにくい
生菌を使用しているため関節炎等発症のリスクがある	生菌を使用していないため発症リスクは少ない 他の疾病との混合ワクチンが市販されている

母豚

肥育豚(子豚)で予防効果を確保するためには、まずは母豚の十分な免疫が重要です。母豚の免疫状態にばらつきがあると肥育豚(子豚)の移行抗体の消失期間にもばらつきがみられます。そのため、母豚の抗体価のばらつきを少なくし、免疫を安定化させる事が重要となります。母豚への適切なワクチン接種を忘れず実施しましょう。

肥育豚

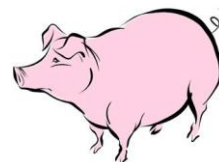
肥育豚(子豚)への実際の接種時期および回数は、基本的に生ワクチンで30～60日齢に1回、不活化ワクチンで60日齢と90日齢に1回ずつとなっていますが、農場での豚丹毒の移行抗体の消失時期や浸潤状況によって異なります。農場の状況を抗体検査で十分に把握し、適切なワクチン接種を行いましょう。

○飼養衛生管理：豚へのストレスは豚丹毒の発生要因となるため、高温多湿な環境や密飼いなどは避けましょう。また、こまめな除糞や清掃を行い、飼養環境を清潔な状態に保つようにしましょう。

●治療：農場で、じんま疹やチアノーゼなどの症状を発見した場合は、獣医師に相談し適切な対策を実施してください。治療を行う場合は獣医師の指示のもとで適切に行い、治療を実施した場合は、休薬期間を遵守しましょう。



異常がみられた場合は
家畜保健衛生所まで
ご連絡を！



神奈川県湘南家畜保健衛生所

〒259-1215 平塚市寺田縄 345

TEL : 0463-58-0152 FAX : 0463-58-5679

<西部出張所> (足柄上合同庁舎第2別館3階)

〒258-0021 足柄上郡開成町吉田島 2489-2

TEL:0465-83-3003 FAX:0465-82-6330